OPINION

だんろん

一期生 今春から社会へ

主体性引き出す「産学連携」講座

深澤（ふかざわ）　晶久（あきひさ）氏
実践女子大特任教授

「二十一世紀の日本を支える人材を育てるには、大学の学び方を本質的に変える必要がある」。こんな熱い思いを抱き、首都圏などの大学と有力企業が講座を実施。ことし四月で五年目に入った。

大手企業などの人材開発責任者が大学に出向き、一年生を対象に実際の「企業課題」などについて講義をし、その課題解決に学生がチームで挑む。このプロセスを通じて学生の「主体性」を引き出すことを目的にした「フューチャー・スキルズ・プロジェクト（FSP）講座」である。

何のために大学に入学したのか、大学で何を究めるべきなのか分からないまま、学生生活を過ごす若者が大半ではないだろうか。やがて勉学も不十分のまま、アルバイト。そしてサークルや部活…。

大学三年生で、最大のイベントである「就活」を迎え、もがき苦しむ。無事に入社しても三年以内に約三割が離職するというデータもある。

私は、一般社団法人「FSP研究会」（安西祐一郎理事長）の監事を務め、スタート時からかかわってきた。少子高齢化が急速に進む中、生産人口を支える重要な役割を果たすべき若者が、本来有する主体性を引き出す場を創りたかったからだ。

講師陣は、製薬会社や飲料メーカー、金融・証券会社などさまざまだ。講座は原則として全十四コマで、学生は一年生の五～七人でチームを組む。前半と後半、二つの企業から出される課題に取り組み、解決策をプレゼンテーションするが、授業以外でも集まって議論する。

いまやFSP講座に参加する大学は首都圏のほか、東海や北陸、関西地区に広がる。私立大中心に約二十、人事や人材開発担当などの企業登録者は約五十を超える。

企業参加者たちからは「学びの場を産学で連鎖させるのは非常に重要」「講座が提供する職業現場さながらの経験が、学生の血や肉になるだろう」と期待する声もある。

メーカーや製薬会社の講座を終えて「周囲の意見に耳を傾ける大切さを知った」「何でもチャレンジしようと積極的な気持ちになれた」と感想を漏らす学生も多い。産学連携は双方が相手の〝土俵〟に踏み込み、企業も大学も共に学び、成長する。

「教えるのではない。塾生から学ぶのだ」と話したのは松下村塾を主宰し、幕末・維新で活躍した吉田松陰。教えるのではなく、教育現場で学生からも学ぶという姿勢に私は強く共感する。

受講した一期生が、今春から社会に飛び出したが、その「成果」を見守りたい。

1957年生まれ。元資生堂人事部人材開発室長。東京商工会議所若者・産業人材育成委員会学識委員

談論誘発

フューチャー・スキルズ・プロジェクト（FSP）講座　企業の一方的な出前講座ではなく、学生が「主体性」を引き出す場と位置付けている。履修単位も取れる。参加企業は▽サントリーホールディングス▽資生堂▽日本オラクル▽アステラス製薬▽野村證券▽ベネッセコーポレーション▽オリエンタルランド▽名古屋銀行▽日立製作所▽能登印刷など。参加大学は青山学院大▽立教大▽明治大▽上智大▽東京理科大▽実践女子大▽横浜国大▽法政大▽東京薬科大▽愛知県立大▽名城大▽北陸学院大▽金沢学院大▽立命館大など。

◆東京新聞　メトロポリタン面
（２０１５年５月１０日付朝刊）